

通年講座 (前期と後期でセットの講座時間:19:00-20:40(100分))

前期 2024年5月13日～ 全10回

後期 2024年10月7日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)

<p>月曜日</p>	<p>現時点の認知言語学から検討、評価、そして更なる展開の可能性を探ります 認知言語学Ⅲ 『「する」と「なる」の言語学』とその周辺 — 共時的、通時的に、そして学際的にも 池上嘉彦 (いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】 オンライン</p>
<p>講義概要</p>	<p>外国語と苦勞してつき合った経験のある人なら誰しも、勉強して身につけた外国語と較べて、いつの間にか自然と身についた自分の母語とは一体どういう言語なのかと改めて考えてみたくなるはず。『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』と題された書物(大修館書店、1981)も、そのような問いかけから生まれたもの、今では認知言語学的な先駆的試みと受けとめられているようです。 「認知言語学Ⅲ」は分類項目の名称、特に高度な理論を紹介するといったものではありません。上記の「日本語とはどのような言語か」という問題との取り組みを、現段階の知見を踏まえて、更に確かなものにしようとする試みです。毎回、とりあげる話題については、基本的な参照資料のほかにも、そこからの新しい展開の可能性を含むような問題への言及も加えます。 例えば、一昨年丸山真男の古典的な論文から読みとれる(‘affective’な意味合いの他動詞群に対して) ‘effective’な意味合いの<生成>の自/他動詞群への注目、昨年名詞の複数表示から芭蕉の古池の句の英訳を経て、英語俳句、子供の俳句、<翻訳論>や桑原武夫の<第二芸術論>など。</p>
<p>テキスト・参考文献</p>	<p>「表現構造の比較 — <スル>的な言語と<ナル>的な言語」(国広哲弥編『日英語比較講座・第4巻・発想と表現』(pp.82-110)研究社、1982)、および、その内容を要約、それに例文などを補足したプリント(全体で15頁)をpdfでテキストとして共有。まず言語的側面を現在の認知言語学の知見を参照しつつ検討します。その際、多くの関連文献からの引用をハンドアウトとして毎回前もって配布します。 (その後は、『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』(大修館書店、1981)から、それを超える文化的側面に関わる問題やさらに専門的な言語理論的な側面(例えば、「場所理論」)などを拾い上げ、補足する予定。)</p>
<p>この課目で前提とされる知識など</p>	<p>日本語母語話者には母語について改めて考察する試みの魅力を体験してほしい。非母語話者でも、日本語への特別な関心とある程度の習熟度があれば歓迎。認知言語学の知識については、必要な場合はその都度説明します。</p>
<p>講義形態</p>	<p>ハンドアウト(スライド)を参照しながらの講義形式が中心となります</p>
<p>プロフィール</p>	<p>池上 嘉彦 (いけがみ よしひこ) 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 東京大学で英語英文学(B.A., M.A.)、Yale大学大学院で言語学(M.Phil., Ph.D.)を専攻。イェール大学、ミシガン大学、バロン自由大学、フーベンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授、ルブリック大学、ロンドン大学、などで客員研究員。日本認知言語学会名誉会長、日本記号学会名誉会員。著書：『英詩の文法』(研究社)、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店)、『ことばの詩学』、『記号論への招待』(岩波書店)、『<英文法>を考える』、『日本語と日本語論』(筑摩書房)、『詩学と文化記号論』(講談社)、『自然と文化の記号論』、『英語の感覚・日本語の感覚』(日本放送出版協会)、など。編著書：The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture (John Benjamins)、共編著書：『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』、『「ナル」的表現」をめぐる通言語的研究』ひつじ書房、など。学術書翻訳、論文、多数。</p>
<p>水曜日</p>	<p>ヒトに備わる言語能力の統語メカニズムを基礎から学びます 生成文法Ⅰ 生成統語論入門 平岩健 (ひらいわ・けん) 明治学院大学教授 【生成文法】 オンライン</p>
<p>講義概要</p>	<p>この講義では生成文法理論に基づく研究プログラムの基本的概念及びヒトに備わる統語メカニズムと構造分析を基礎から学びます。特に日本語と英語の統語構造の共通点と違いを詳細に観察しながら、自然言語の分析では構造という概念が必須であり、それにより様々な現象に説明がつくことをデータに基づいて学んで</p>

		<p>行きます。</p> <p>教科書は渡辺明著「生成文法」（東京大学出版）を使用し、教科書の内容に沿って講義を進めます。1年かけて取り扱うトピックは移動現象（主語やWh句やその他）、名詞句や動詞句、従属節の構造と句構造の一般理論などです。一方で、講義の中で毎回構造を書く練習をたくさんしてもらいます。そして受講者の解答をカメラで共有しながらどういう間違いをしてしまうか確認しながら進めていきます。基礎からじっくり解説しますので、生成文法理論に興味がある方だけでなく、自分が専門的に研究したい分野とは異なるけど生成文法理論における分析方法や基本的概念などを理解しておきたいという方にもおすすめできる内容になっています。</p>
	テキスト・参考文献	渡辺明著「生成文法」（東京大学出版 2009）
	この課目で前提とされる知識など	基礎から学びますので統語論の前提知識は不要です。概論レベルの入門的な言語学の知識はあるとよりよいです。
	講義形態	講義形式ですが、講義内で多く練習問題を取り入れ受講者の解答や疑問を見て説明しながら進めていきます。
	プロフィール	平岩 健（ひらいわ けん）明治学院大学文学部英文学科教授 専門は理論言語学, 統語論, フィールド言語学に基づく理論研究. Ph.D. in Linguistics (MIT, 2005). New York University言語学科でのポストドクの後, University of Victoria言語学科で教鞭を執り現職. The origin and architecture of existential indeterminates in Okinawan (Proc. of LSA, 2020), Internally headed relative clause. (Wiley Blackwell Companion to Syntax, 2016), The faculty of language integrates the two core systems of number (Frontiers in Psychology: Language Science, 2016)など.

前期講座（半期単位で受講可能講座） 2024年5月13日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)

時間:19:00-20:40(100分)

月曜日	音声学的な知識と技能の基礎を習得する 調音音声学		中川裕（なかがわ・ひろし） 東京外国語大学教授 【音声学】 オンライン
	講義概要	<p>この授業では、国際音声記号 (IPA) を用いた調音訓練を通して音声学の基礎を身につけることを目指します。多様な言語音を音声器官が作り出す仕組みを学び、さらにそれらを聞き分け、発音仕分ける技能を学びます。解説を受動的に聞くだけでなく、IPA 記号の手本の発音の模倣をしてもらいます。そして、参加者の発音に関する教師からのフィードバック(正誤と発音補正の方法)を授業中に共有することを積み重ねます。その過程で、調音の内省能力と聞き分け能力は進歩します。参加者の積極的な取り組みを期待します。</p> <p>耳慣れない言語音も多く扱う一方、お馴染みの言語音の微細な違いがどう表記し分けられるかも学びます。また、IPA用語と弁別素性の用語との対応を理解します。練習中の自分の発音が正しいかどうか自信が持てないとき、その音響的特性を視覚化すると発音訓練に役立つ場合があります。その方法についても無料アプリケーション Praat を使って学びます。必要に応じて、MRI で撮影した調音運動の資料の利用法も学びます。</p>	
	テキスト・参考文献	適宜、講義資料を配布します。	
	この科目で前提とされる知識など	講座開始に先立って、 www.praat.org のウェブページの左上から、自分の OS に合うバージョンの Praat をダウンロードして、インストールし、起動の確認まで独力でできること。	
	講義形態	模倣発音の実習を交えながら講義を進めます。	
	プロフィール	中川裕 東京外国語大学総合国際学研究院教授 PhD (Linguistics) 音声学、音韻論、コイサン言語学 主要業績は下記のページをご覧ください。	

	https://researchmap.jp/nhirosi
	認知言語学Ⅲ 池上 嘉彦(いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】 内容は通年講座を参照
火曜日	特殊から普遍へ、「ことばと社会」探究 社会言語学 嶋田珠巳 (しまだ・たまみ) 明海大学准教授 【社会言語学】 オンライン
	講義概要 We're after missing the bus! これは、停車していたバスがすんでのところで 行ってしまったとき一緒にバスを追っていた人が発した言葉です。場所はアイルラ ンド、コークの街。 今そこにあるその言語形式がどのようにして生み出され(言語接触による文法形 成)、それがどのようにして体系の一部をなし(文法体系)、言語コミュニティに おいて用いられているのか(社会的意味のインタラクション)。さらに、そのよう な言語はどのような土壌で育まれ、人々はどのような言語意識をもつのか(言語使 用とアイデンティティ、言語と文化)、その社会は言語との関係においてどのよう なあり方をしているのか(言語政策、言語教育、二言語主義)。 本講座では、土着のアイルランド語から英語への言語交替を経験したアイルラ ンドという、ある〈特殊〉、あるフィールドにおける具体的な言語形式から、その広 がりのある奥に入っていきます。そこにある「ことばと社会」を考える素材を受け 取り考察しながら、〈普遍〉に通じる理解を導く試みです。上に括弧書きで書いた ものは本講座の主要なトピックです。授業は、上記トピックに関する文献の講読を 交え、社会言語学の基礎的な概念や考え方を解説しながら行います。初めての方か ら研究の領域に足を踏み込んでいられる方までを想定して、「話者の見える言語学」と しての社会言語学の魅力に誘います。
	テキスト・参考 文献 教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。
	この課目で 前提とされ る知識など 特にありません。教室でのディスカッションも含めて、あらたな知のきっかけにな るかもしれません。
	講義形態 ハンドアウト(スライド)を参照しながらの講義形式が中心となります
	プロフィール 嶋田 珠巳 (しまだ・たまみ) 明海大学外国語学部教授 2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博 士(文学)。著書に『英語という選択—アイルランドの今』(岩波書店2016年)、 共編著に『言語接触—英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』(東京大 学出版会2019年)、『時間と言語』(三省堂2021年)、共著書に『時間はなぜあ るのか?—チンパンジー学者と言語学者の探検』(ミネルヴァ書房2022年)、論文 に“Speakers' awareness and the use of <i>do be</i> vs. <i>be after</i> in Hiberno-English”, <i>World Englishes</i> 35, 2016年など。研究テーマは「言語知識と言語変化—アイルランド英語 使用データに基づく社会的意味形成の理論と検証」と「言語による時間生成」。
	母語獲得を支える「こころ」の仕組みについて考える 言語心理学 母語獲得研究入門 杉崎鉦司 (すぎさき・こうじ) 関西学院大学教授 【言語心理学】 オンライン
	講義概要 「こころ」(mind)のさまざまな領域について、その発達には先天的要因と後天的要 因の両方が関与しており、発達はその相互作用によって説明されるべきことが明ら かとなっています。生成文法と呼ばれる言語理論は、母語知識はこころの領域の一 つであり、その獲得は①人間に生まれつき備わっている母語獲得のための内的メカ ニズムと②生後に取り込まれる言語情報との相互作用によって達成されると仮定し ています。つまり、母語知識は多くの人々が素朴に思い描いているように子どもが 大人の発話を模倣することによって獲得されるのではなく、その発達の筋道と到達

		点が遺伝によってあらかじめ定められていると考えるのです。この授業では、この生成文法理論の仮説が妥当であることを示す実際の母語獲得（特に日本語と英語の獲得）からのさまざまな証拠を議論します。生成文法理論に基づく母語獲得研究の意義や研究方法、主な研究成果や今後の課題について、できるだけわかりやすく説明します。
	テキスト・参考文献	テキスト：教科書は使用せず、ハンドアウト（授業スライド）を配布します。 参考文献：『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』（2015年・岩波書店）、『言語研究の世界：生成文法からのアプローチ』（共編・共著 2022年 研究社）
	この課目で前提とされる知識など	前提知識は特に必要ありません。生成文法理論に関する基礎知識があると、理解が深まります。
	講義形態	ハンドアウト（スライド）を参照しながらの講義形式が中心となります
	プロフィール	杉崎 鉦司（関西学院大学文学部教授） 生成文法理論に基づく母語獲得研究を専門にしています。主に、日本語や英語を対象に、文の構造や意味にかかわる性質の獲得について調査を行っています。2003年コネチカット大学言語学科博士課程修了(Ph.D. in Linguistics)。主要著書・論文に『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』（2015年 岩波書店 日本英語学会賞受賞）『言語研究の世界：生成文法からのアプローチ』（共編・共著 2022年 研究社）、“On the Acquisition of Prepositions and Particles” (2016年 The Oxford Handbook of Developmental Linguistics, OUP)など。
水曜日	言語学にまると入門する 言語学入門	長屋尚典（ながや・なおのり） 東京大学准教授 【言語学入門】 オンライン
	講義概要	この講義は、言語学をはじめて勉強する方を対象に、言語学に広く入門することを目指します。音声学・音韻論から形態論、統語論、意味論・語用論、社会言語学、言語類型論にいたるまで、毎回一分野を取り上げて講義します。世界の言語の多様性にも関心を向けつつ、「言語学がどんな学問なのかざっと勉強してみたい」という方にむけてコンパクトに各分野の要点を解説します。 講義全体を通して、言葉を理解するには言葉の一部分・一側面を取り出して分析しただけでは不十分であり、いろいろな側面から全体を考えて初めて本当に分かるということをお伝えたいと考えています。 今のところの予定: 1. 言語と言語学 2. 音声学 3. 音韻論 4. 形態論 5. 統語論 (1) 6. 統語論 (2) 7. 意味論・語用論 (1) 8. 意味論・語用論 (2) 9. 社会言語学 10. 言語類型論
	テキスト・参考文献	ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	入門なので言語(学)に対する興味があれば十分です。
	講義形態	ハンドアウト（スライド）を参照しながらの講義形式が中心となります

	プロフィール	<p>東京大学大学院人文社会系研究科・准教授 PhD in Linguistics (Rice University, 2011) フィリピンやインドネシアで話されるオーストロネシア諸語を中心に言語類型論の観点から研究しています。最近書いた論文に "Beyond questions: Non-interrogative uses of ano 'what' in Tagalog" (Journal of Pragmatics, 2022), "Directionals, topography, and cultural construals of landscape in Lamaholot" (Linguistics Vanguard, 2022) などがあります。 https://note.com/norinagaya/</p>
		<p>平岩 健(ひらいわ けん) 明治学院大学教授【生成文法】 内容は通年講座を参照</p>
木曜日	<p>言語研究の全体像を知る 言語学概論</p>	<p>窪園 晴夫(くぼの・はるお)国立国語研究所客員教授 杉岡 洋子(すぎおか・ようこ)慶應義塾大学名誉教授 平岩 健(ひらいわ・けん)明治学院大学教授 松井 智子(まつい・ともこ)中央大学教授 吉田 和彦(よしだ・かずひこ)京都産業大学客員教授</p> <p style="text-align: right;">【言語学概論】 オンライン</p>
	講義概要	<p>「言語学概論」は前期と後期の2期にわたり、合計20回の講義を計10名の講師が2回(2週)ずつ分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説する課目です。半期だけの履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。</p> <p>今期は音声学・音韻論、形態論、生成文法、意味論・語用論、史的言語学の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。</p>
	テキスト・参考文献	各講師が指定(もしくは配布)する。
	この課目で前提とされる知識など	ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特に勧めの授業です。
	講義形態	講義形式で進めます。
	プロフィール	下記以外は各講師の講義欄参照
		<p>窪園 晴夫 国立国語研究所 客員教授 専門は音韻論、音声学。1986年英国エジンバラ大学大学院(言語学)修了(Ph.D. 1988年)。南山大学、大阪外国語大学、神戸大学で教鞭を執った後、2010年より2022年まで国立国語研究所教授。一般言語学や言語類型論の視点から日本語の音韻構造と音韻構造の普遍性・多様性を研究している。主な著書に『語形成と音韻構造』(1995)、『一般言語学から見た日本語のプロソディー』(2021)(以上、くろしお出版)、『日本語の音声』(1999)、『新語はこうして作られる』(2002)、『アクセントの法則』(2006)、『数字とことばの不思議な話』(2011)(以上、岩波書店)、『通じない日本語』(2017, 平凡社)、Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (2022, De Gruyter Mouton) など。</p> <p>杉岡 洋子 慶應義塾大学名誉教授 シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了(Ph.D.) 語形成や語彙意味論、形態論と統語論の関係、語の処理に関わる心や脳のしくみを研究しています。 主要著書・論文: 『語の仕組みと語形成』(共著、研究社、2002)、『I-2 形態論・語形成』(『よくわかる言語学』、ミネルヴァ書房、2019)、『名詞の意味と構文』(分担執筆、大修館、2011)、『語の処理の心的・脳内メカニズム』(共著、『形態論』、朝倉書店、2016)。Derivational affixation in the lexicon and syntax (with Takane Ito), Handbook of Japanese lexicon and word formation, pp.347-386. Mouton de Gruyter, 2016.</p>

		<p>吉田和彦 京都産業大学外国学部客員教授。京都大学名誉教授。日本学士院会員。コーネル大学Ph.D. (言語学)。言葉にかかわる問題全般に興味がありますが、特に言葉の変化に興味を寄せています。印欧系諸言語は東は中央アジア、西はアイルランドにいたる広大な地域で話されていました。それらの言語が分岐する前の印欧祖語の再建および分派諸言語の後の変化という問題に取り組んでいます。そして紀元前二千年紀に遡る古い文献記録を持つヒッタイト語などの古代アナトリア諸語が、この問題の解明に向けて重要な鍵を担っているため、アナトリア諸語を中心に据えた比較言語学的研究を世界の研究者仲間と協働しながら進めています。みなさんの関心を広げるとともに、ことばの変化に関心がある方の研究テーマが実を結ぶように、ともに学び合いたいと思います。</p>
	<p>これまでほとんど研究されていない、日常のことばの新しい面について一緒に考えましょう。 日本語文法理論 I コミュニケーションの中の発話と文法</p>	<p style="text-align: right;">定延利之 (さだのぶ・としゆき) 京都大学教授 【日本語文法理論】 オンライン</p>
<p>講義概要</p>	<p>「あの人の話、長くない？」と訊かれて、「だ」と答えるのは不自然です。しかし「だな」「だよね」は自然です。なぜでしょう？ / 「5時にこの店で会おうって彼と約束したんです」は普通に言えるのに、「5時にこの店で会おう。そう彼と約束したんです」は、芝居のセリフみたいで言いにくいのはなぜでしょう？ / 「このあたりに飲料の自販機ありませんか？」と尋ねたところ、相手が「さー」と言い始めたら、その後はダメな答（「このあたりはない」「わからない」）しか続きません。考えてもダメな答しか出ないとわかっているのに、なぜ相手は「さー」と言って考えるのでしょうか？ / 松本駅に到着した列車の車内アナウンス「まつもとー」は音調が平坦です。行方不明の松本氏を捜して、森の中を進みながら言う「まつもとー」も平坦です。しかし目の前の松本氏には「まつもとお」と下降調で呼びかけられます。なぜでしょう？ / 驚いた時に「あら」「おや」（低高）ではなく「あら」「おや」（高低）と言うと上品な感じがするのはなぜでしょう？ / アンケート調査の結果を踏まえて、コミュニケーションの現場に根ざした文法システムについてお話しする予定です。</p>	
<p>テキスト・参考文献</p>	<p>授業中に指示します。</p>	
<p>この課目で前提とされる知識など</p>	<p>特にありません。</p>	
<p>講義形態</p>	<p>ハンドアウト（スライド）を参照しながらの講義形式が中心となります。</p>	
<p>プロフィール</p>	<p>定延利之、京都大学大学院文学研究科教授。軽視・無視されがちな「周知的」な現象の観察を通じて、言語学とコミュニケーション研究の前提を再検討しています。主な単著は『やわらかい文法』（教養検定会議、2024）、『コミュニケーションと言語におけるキャラ』（三省堂、2020）、『文節の文法』（大修館書店、2019）、『コミュニケーションへの言語的接近』（ひつじ書房、2016）、『煩惱の文法』（凡人社、2016、筑摩書房、2008）、『日本語社会のぞきキャラくり』（三省堂、2011）、『日本語不思議図鑑』（大修館書店、2006）、『ささやく恋人、りきむレポート』（岩波書店、2005）、『認知言語論』（大修館書店、2000）。最近の主論文は「発話への文法的接近」（『国語と国文学』99（5）、2022）、“Is discourse made up of sentences?” (Journal of Japanese Linguistics, 37 (2), 2021)。</p>	
<p>ことばの不思議さについて感度を養う 認知言語学 I 初歩からの認知言語学</p>		<p style="text-align: right;">野村益寛 (のむら・ますひろ) 北海道大学教授 【認知言語学】 オンライン</p>
<p>金曜日</p>	<p>講義概要</p>	<p>私たちは世界から意味を読み取り、世界に意味を与えながら生きています。ヒトの場合、この営みにことばが関与するのが普通です。このことから、言語は世界を<意味>として捉える認知の営みを可能にする記号の体系であるという考えが導き出されます。このような考え方に立つ認知言語学の基礎について、この授業では下記のテキストに沿って、日英語の語彙・文法現象を例に概観していく予定です。</p>

	<p>認知言語学が問題にするような現象の多くは、理系の学問と違って、大がかりで高価な実験装置なしに観察できるものです。例えば、「耳が遠い」はどのようにして「耳がよく聞こえない」という意味になるのでしょうか？「(年のせいで)トイレが近い」はどうでしょうか？「ことばを濁す」はなぜ「明言を避ける」の意味になるのでしょうか？「違わない」を「違くない」と言う人がいるのはなぜでしょうか？</p> <p>この授業では認知言語学の基本的な考え方や道具立てを身につけ、こうした身の回りのことばの不思議さについての感度を養い、自分で分析を試みられるようになることを目指したいと思います。</p>
テキスト・参考文献	『ファンダメンタル認知言語学』(ひつじ書房, 2014)。これから購入しようとする方は、加筆・修正を経た3刷(2023年)の入手が望ましい。
この課目で前提とされる知識など	言語学の予備知識は前提としませんが、英語の事例や英語で書かれた文献からの引用をすることがあるので、大学受験レベルの英語力があることが望ましい。
講義形態	講義が中心ですが、質問やコメントを受ける時間、および課題について議論する機会を設ける予定です
プロフィール	北海道大学文学部・大学院文学研究院教授。専門は英語学、認知言語学、意味論。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(文学修士)、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院言語学科博士課程修了(Ph.D.)、日本女子大学文学部専任講師、北海道大学文学部准教授を経て、2014年より現職。著書に『ファンダメンタル認知言語学』(ひつじ書房, 2014), 『英文法の考え方 — 英語学習者のための認知英文法講義』(開拓社, 2020)などがある。
日本語文法史から文法変化を考える 日本語文法理論Ⅱ 文法変化の研究	小柳智一(こやなぎ・ともかず) 聖心女子大学教授 【日本語文法理論】 オンライン
講義概要	<p>ある文法形式が形態を変えたり意味を変えたりする変化を「文法変化」といいます。例えば、現代語の過去を表す「た」は、さかのぼると古典語の「たり」に行き着き、過去を表すことでもありませんでした。つまり、古典語の「たり」は形態的にも意味的にも変化し、現代語の「た」になったのです。本講義ではこのような現象を扱います。</p> <p>日本語文法史(8世紀から現代まで)における文法変化の事例は実に多く様々ですが、個別事例の紹介にとどまらず、個別事例から文法変化一般に関する知見がどのように得られるか、という理論的な問題を考えます。考察の過程では、よく知られた「文法化(grammaticalization)」理論の再検討も行います。</p> <p>具体的に取り上げる話題は、文法変化を含む言語変化にはどのような段階があり、どのような要因が考えられるか、文法変化にはどのような傾向があるか、文法変化にはどのような種類があるか、新しい文法的意味はどこから持って来られるか、孤例はどう考えるべきか、などなど。これらのことを考えながら、そもそも文法変化の研究とは何をすることか、という根本的な問題にも迫りたいと思います。</p>
テキスト・参考文献	教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。なお、拙著『文法変化の研究』に基づく内容を多く含みますので、参考にしていただければ幸いです。
この課目で前提とされる知識など	特にありませんが、高等学校で学習する古典文法の知識と日本語史に関する基礎知識があれば、それに越したことはありません。
講義形態	ハンドアウト(スライド)を参照しながらの講義形式が中心となります。
プロフィール	<p>聖心女子大学現代教養学部教授。</p> <p>1999年国学院大学大学院文学研究科博士課程後期修了、博士(文学)。</p> <p>専門は日本語学、日本語文法史。</p> <p>主な著作は『文法変化の研究』(くろしお出版、2018)、『認知言語学を拓く』(共著、くろしお出版、2019、「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」執筆)、『日本語と世界の言語のとりたて表現』(共著、くろしお出版、2019、「日本語のとりたて表現の歴史」執筆)、『構文と主観性』(共著、くろしお出版、2021、「4種類の「主観」の用語法」執筆)、『日本語と近接言語における文法化』(共著、ひつじ書房、2023、「一から多への言語変化—類推と群化—」執筆)など。</p>

後期講座（半期単位で受講可能な講座） 2024年10月7日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)
 時間:19:00-20:40(100分)

	文法形式の多義の分析から文法の基本問題へ 日本語文法理論Ⅲ 日本語述語論 いわゆるモダリティ形式の諸問題 川村 大 (かわむら・ふとし) 東京外国語大学教授 【日本語文法理論】 オンライン
	講義概要 個別の文法現象についてやや深く掘り下げて考えることで、文法研究の様々な面白さに出会ってもらうことを目指します。今年度は、「動詞+ウ・ヨウ、ダロウ、ハズダ、ベキダ、ヨウダ、ラシイ、カモシレナイ」等の諸形式をとりあげます。これらの形式は（広い意味での）「推量」や、「意志」「勧誘」「当為」「可能性」「必然性」といった意味を表し、現在では「モダリティ（形式）」と呼ばれるのが普通になってきました。「モダリティ」は、現在の日本語文法の世界ではしばしば「話し手の何らかの態度」をめぐる意味だ、そういう意味での「主観的意味」のことだ、などと言われます。確かに「推量」「意志」「勧誘」などは「主観的意味」だと言って構わないでしょうが、だからといって上記の諸形式に「主観性表現の形式」というラベルを貼って良いのでしょうか。これらはどういう意味で「主観的意味の表現」なのでしょう。個別形式における形と意味の関係（たとえば《動詞+ウ・ヨウ》の多義の問題）を丁寧に再検討することからはじめて、日本語文法では「モダリティ」という範疇をどのように定義したらよいか、ということまで、いくつかの指摘を行ないたいと思います。
月曜日	参考・参考文献 尾上圭介『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、2001） 尾上圭介「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』（朝倉書店2004） ほか
	この課目で前提とされる知識など 日本語学・言語学の入門程度の知識が必要です。古文の知識は前提としません。
	講義形態 講義形式ですが、適宜質疑の時間を設けます。
	プロフィール 川村大 (かわむら・ふとし) 東京外国語大学大学院教授 国語学（文法、文法論）。 1990年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士（文学）。 「マジの表す意味——ベシとの対比において——」（『日本研究教育年報』3号、1999）、「叙法と意味——古代語ベシの場合——」（『日本語学』21巻2号、2002）、「ラル形述語文の研究」（くろしお出版、2012）、「ベシ」「マイ/マジ」「マシ」ほか（『日本語文法事典』大修館書店、2014）、「打消の推量の助動詞」「推量の助動詞」ほか（『日本語大事典』朝倉書店、2014）など。
	認知言語学Ⅲ 池上 嘉彦(いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】 内容は通年講座を参照

火曜日	語用論の基礎から応用まで 語用論 <p style="text-align: right;">松井智子（まつい・ともこ） 中央大学教授 【語用論】 オンライン</p>	
	講義概要	語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について考察していきます。さらに広告やコマーシャルといった、視聴者の購買を促すことを目的とした情報伝播を取り上げ、コミュニケーションの一形態としてその特徴を語用論の枠組みで検討します。広告やコマーシャルは、メッセージの送り手が見えにくいことが多く、その特徴はSNSなどに見られるメッセージと共通しています。このようなコミュニケーションにおいては、聞き手がメッセージの送り手の真意を正しく把握することが難しくなりがちです。この授業では、語用論の理論に基づいて、それはなぜなのか、考えていきます。
	テキスト・参考文献	今井邦彦編 「最新語用論入門12章」 大修館 2009年
	この課目で前提とされる知識など	特にありません。
	講義形態	講義に加え、ワークシートやグループセッションも予定しています。
	プロフィール	中央大学文学部教授 ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部言語学科博士課程修了（PhD）。 著書にBridging and Relevance (John Benjamins, 2000, 市河賞)、『子どものうそ、大人の皮肉』（岩波書店2013年）、『ソーシャルブレインズ』（分担執筆、東京大学出版会、2009）、『ミス・コミュニケーション』（分担執筆、ナカニシヤ、2011）などがある。
さまざまな移動現象の分析とその帰結を考える 生成文法Ⅱ 移動現象と統語理論 <p style="text-align: right;">高野祐二（たかの・ゆうじ） 金城学院大学教授 【生成文法】 オンライン</p>		
講義概要	人間言語にはさまざまな移動現象が存在します。生成文法の統語論研究において、そのような移動現象の研究は常に中心的課題となってきました。典型的な移動現象として古くから取り上げられてきたものとして、英語の疑問文における疑問詞の移動や受動態における名詞句の移動があります。こういった移動現象の分析は、理論の変遷とともに変わります。生成文法の初期段階では移動現象ごとに変形規則を立てていましたが、統語理論の発展とともに移動現象は個別の変形規則ではなく、Move- α という一般的な移動操作で捉えられるようになりました。そして、最近のミニマリスト・プログラムでは、移動特有の操作を仮定するのではなく、併合という統語部門の基本操作によって移動現象も分析する流れになっています。本講義では、典型的な移動現象とは異なる性質を示す移動現象を取り上げ、その分析と帰結を考察します。述語移動、主要部移動、スクランプリング、残部移動、右移動、側方移動などを取り上げ、その分析を通じて移動現象の研究が統語理論の構築にいかに関与しているかを考えます。	
テキスト・参考文献	適宜、講義資料を配布します。また、参考文献は、講義の中で紹介します。	
この課目で前提とされる知識など	生成文法統語論の基礎的知識を前提とします。	

	講義形態	講義が中心ですが、質問やコメントを受ける時間、および課題について議論する機会を設ける予定です。
	プロフィール	高野祐二 金城学院大学文学部英語英米文化学科教授 1996年カリフォルニア大学アーバイン校大学院言語学科博士課程修了。Ph.D. (言語学)。専門は生成文法統語論。主な論文・著書は、Predicate Fronting and Internal Subjects (Linguistic Inquiry、1995)、Object Shift and Scrambling (Natural Language & Linguistic Theory、1998)、Surprising Constituents (Journal of East Asian Linguistics、2002)、Scrambling and Control (Linguistic Inquiry、2010)、Exploring Merge: A New Form of Sideward Movement (The Linguistic Review、2020)、移動現象を巡る諸問題 (共著、開拓社、2021) など。
水曜日	「意味」の意味を掘り下げる 意味論 意味論の基礎	酒井 智宏 (さかい・ともひろ) 早稲田大学教授 【意味論】 オンライン
	講義概要	意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。その理由の一つは、形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc.という分野があるのに対して、たんなる「意味論」という分野が存在しないことです。これは「意味」という語が本質的に多義であることを反映しています。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味(論)について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみましょう。 人物Aとその完全なコピー人間A'は同じ「意味」を理解しているのでしょうか。「理解している」と答える立場を意味論的内在主義、「理解していないこともある」と答える立場を意味論的外在主義と呼びます。AとA'は脳状態が同じですから、一見したところ内在主義が正しいことは明らかであるように思われます。2023年度までの私の講義では、意味が「一見した」だけではすまないものであることを体感していただきました。2024年度も引き続き意味と意味理解の関係を掘り下げてみたいと思います。継続して受講する方にとっても、今回から新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるように努めます。
	資料・参考文献	プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	予備知識は必要ありません。
	講義形態	ハンドアウト(スライド)を参照しながらの講義形式が中心となります
	プロフィール	酒井 智宏 (さかい・ともひろ) 早稲田大学文学学術院教授 意味論、語用論 2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術) 2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage 主要著作:『正しく書いて読むための英文法用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2019) 『最新理論言語学用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2017)、『理論言語学史』(分担執筆、開拓社、2017)
	平岩 健(ひらいわ けん) 明治学院大学教授【生成文法】 内容は通年講座を参照	
木曜日	言語研究の全体像を知る 言語学概論	長屋 尚典(ながや・なおのり)東京大学准教授 広瀬 友紀(ひろせ・ゆき)東京大学教授 松本 曜(まつもと・よう)国立国語研究所教授 小西 いずみ(こにし・いずみ)東京大学准教授 小柳 智一(こやなぎ・ともかず)聖心女子大学教授 【言語学概論】 オンライン

講義概要	<p>「言語学概論」は前期と後期の2期にわたり、合計20回の講義を計10名の講師が2回(2週)ずつ分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説する課目です。半期だけの履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。</p> <p>今期は言語類型論、言語心理学、認知言語学、社会言語学、日本語文法理論の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は、5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。</p>
テキスト・参考文献	各講師が指定(もしくは配布)する。
この課目で前提とされる知識など	ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特にお勧めの授業です。
講義形態	講義形式で進めていきます。
プロフィール	<p>広瀬 友紀 東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻教授 1999年 The City University of New York にてPh.D. in Linguistics 取得。心理言語学のなかでも、特に人間の言語情報処理に関心があります。言語発達過程の子どもがどのようにその知識を運用するかにも興味があります。著書に『ちいさい言語学者の冒険』(岩波書店)、『子どもに学ぶ言葉の認知科学』(ちくま書房)、『ことばと算数 その間違いにはワケがある』(岩波書店)。</p> <p>松本 曜 国立国語研究所研究系教授 専門は、意味論、形態論、統語論、語用論、類型論、認知言語学。主著にComplex predicates in Japanese (CSLI Publications)、編著に『移動表現の類型論』(くろしお出版)などがある。</p> <p>小西 いずみ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 東京都立大学人文学部卒業、同大学院人文科学研究科修士課程修了、東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了、博士(文学)。専門は日本語学、方言学。主要著書：『富山県方言の文法』(ひつじ書房、2016年)、『日本語学の教え方』(共編著、くろしお出版、2016年)、『日本語の格表現』(共著、くろしお出版、2022)、『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』(共著、国立国語研究所、2022) など。</p>
語形成に潜む文法を解き明かす 形態論・語形成論 語形成と語彙の意味	<p style="text-align: right;">由本陽子 (ゆもと・ようこ) 大阪大学名誉教授 【形態論・語形成論】 オンライン</p>
講義概要	<p>「語」の多くは、複数の要素から成る複雑語です。複雑語の構造は、文の構造と違って、一見構成要素が単に並列的に結合しているだけのように見えるかもしれませんが、そうではありません。語構造にも文と同様に階層性があり、その関係性は、構成要素である語や接辞の性質と「語の文法」(すなわち、複雑語の形成を制約する普遍的原理や個別言語ごとの法則)によって決定されています。私たちは、自身のレキシコン(心の中の辞書)にある、既存の語についての知識と、語の文法とを使うことにより、新たな語を作り、また、知らない合成語でもその意味を理解することができているのです。本講座では、まず、文と語、両レベルの文法に関わるような語に関する情報とはどのようなものかについて、特に意味に注目して解説します。つぎに、日本語と英語の派生語や複合語の具体的な分析を紹介しながら、語の文法について学びます。私たちの語についての知識がどのようなものか、また、日英語間で語形成のメカニズムはどのように異なるかについて考えてみましょう。</p>
テキスト・参考文献	教科書を使用する予定がありますが、追ってお知らせします。【参考文献】由本陽子、『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 2011年、開拓社

	この課目で前提とされる知識など	分析対象としては、日本語と英語を使いますので、日英語が理解できることを前提とします。また、生成文法におけるごく初歩的な知識がないと講義の理解が困難かもしれません。
	講義形態	講義が中心ですが、質問やコメントを受ける時間、および課題について議論する機会を設ける予定です。
	プロフィール	大阪大学人文学研究科・名誉教授。大阪大学文学研究科博士課程（英語学専攻）修了，文学博士（2004年大阪大学）。『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房，2005。『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』開拓社，2011。"Conversion and Deverbal Compound Nouns," Kageyama, T. and Kishimoto H. (eds.), Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation, Mouton De Gruyter, 2016, 311-345。"Semantic Interpretation of Japanese Verbal Compounds Revisited," Hae-Sung, J. (ed.), Japanese/Korean Linguistics vol. 28, CLSI, 2022, 17-37.
金曜日	英語を歴史的・通時的にみる 史的言語学 英語史概論	堀田隆一（ほった・りゅういち） 慶應義塾大学教授 【史的言語学】 オンライン
	講義概要	英語という言語の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠です。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語はいかにして世界的な言語となったのか等の問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観、言語観を形成することが本講義の目標です。英語史の通史を描いていきますが、とりわけ内面史（言語体系の変化）と外面史（言語を取り巻く社会の変化）の連動に注目します。講義は、主にテキストではなくスライドを利用して進める予定です。参考文献は適宜紹介していきますが、まず堀田隆一（著）『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）を参照してください。
	テキスト・参考文献	参考文献は適宜紹介していきますが、まず堀田隆一（著）『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）
	この課目で前提とされる知識など	入門・概論レベルの言語学の知識が必要です。また、英語のほかにフランス語やドイツ語などの印欧語を学んでいると英語史の理解が深まります。
	授業形態	ハンドアウト（スライド）を参照しながらの講義形式が中心となります
	プロフィール	堀田隆一（慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授）。PhD（Glasgow University, 2005）。主要出版物：『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）、『英語史で解きほぐす英語の誤解—納得して英語を学ぶために』（中央大学出版部、2011年）、『スペリングの英語史』（翻訳）（早川書房、2017年）、The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English (Tokyo: Hituzi Syobo, 2009)。英語史の話題を日々提供する「hellog～英語史ブログ」（ http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/ ）とVoicy「英語の語源が身につくラジオ（heldio）」（ https://voicy.jp/channel/1950 ）を継続中。
	準備中	峯島 宏次（みねしま・こうじ） 慶應義塾大学准教授 【言語学特殊講義】 オンライン
	講義概要	
	テキスト・参考文献	

	この課目で 前提とされ る知識など	
	講義形態	
	プロフィール	

理論言語学講座夏期集中

※100分×10コマの講義の時間数を3日間で変則的に組み込みます。時間割が決まり次第、研究所公式サイト等でお知らせいたします。

8月 9-11日	準備中	西村 義樹（にしむら・よしき） 東京大学教授 【認知言語学】 対面+オンライン（予定）
	講義概要	
	テキスト・参考文献	
	この課目で 前提とされ る知識など	
	講義形態	
8月30-9 月1日	身近な題材を分析対象として、音声現象の様々な側面について考える 計量音声学	川原繁人（かわはら・しげと） 慶應義塾大学教授 【音声学】 対面+オンライン（予定）
	講義概要	私は、「我々が言語音を発するとき、どの器官をどのように使っているのか（調音音声学）」「我々が発した音は、どのように空気を伝わって聴者に届くのか（音響音声学）」「聴者は、その音をどのようにして知覚しているのか（知覚音声学）」「我々は母語の音に関してどのような抽象的な知識を持っているのか（音韻論）」について研究しています。本講義は、ポケモン・プリキュア・日本語ラップ・音楽の分析などを通して、音声学の様々な側面について学んでいきます。学問を学ぶと「世界の解像度が上がる」と言われますが、音声学も同じです。我々がふだんは無意識で使っていることばに対して、新たな発見がたくさんあり、少しだけ世界観が変わるかもしれません。また、音声学の知見をラッパーや歌手などの声のプロたちに還元する活動（=アウトリーチ活動）についても議論します。
	テキスト・参考文献	
	この課目で 前提とされ る知識など	前提知識は必要ありません。ただし、授業では、積極的に質問し、自分なりに例を考え、議論に参加する態度をもって受講してください。授業は、「知識の伝達の間」ではなく、あくまで「議論する場所」と考えています。
	講義形態	講義に加え、ワークシートやグループセッションも予定しています。

	プロフィール	<p>川原繁人、慶応義塾大学言語文化研究所教授。2007年マサチューセッツ大学より博士号（言語学）。ジョージア大学、ラトガーズ大学にて教鞭を執った後、現職。専門は言語学、音声学。「ことばを話せることって、とってもすごいこと！」という想いを伝えるため、幅広い読者に向けて本を執筆している。代表的な著書として『音とことばのふしぎな世界』（岩波科学ライブラリー）、『音声学、娘とことばの不思議に飛び込む』（朝日出版社）、『フリースタイル言語学』（大和書房）、『なぜ、おかしな名前はパピプペポが多いのか？言語学者、小学生の質問に本気で答える』（ディスカヴァー21）、『言語学的ラップの世界』（東京書籍）、『うたうからだのふしぎ』（共著、講談社）がある。義塾賞（2022）、日本音声学会学術研究奨励賞（2016、2023）を受賞。</p>
--	--------	--